

横田英史の 書籍紹介コーナー



THE COMING WAVE

～AIを封じ込めよ
DeepMind創業者の警告～

ムスタファ・スレイマン、マイケル・バスカー、
上杉隼人・訳
日経BP 日本経済新聞出版 2,420円(税込)

AlphaGoを開発したDeepMindの共同創業者で現在はMicrosoft AI CEOの筆者が、野放図なAI技術の進歩と適用範囲の拡大に警鐘を鳴らした書。AIの進歩を自ら先導し、目の当たりにしてきた筆者ならではの危機感が表れている。AIを封じ込める方策を考えないと大混乱と大惨事をもたらすと訴える。

2024年のノーベル物理学賞と化学賞をAI研究者が受賞するなど、AIが社会や生活、文化を大きく変えつつある今だからこそ読むべき1冊である。

筆者は、科学技術の歴史を丹念に追うとともに、進歩を後押しする研究者や技術者、ビジネスパーソンモチベーションに踏み込んで持論を展開する。大惨事をもたらすイノベーションを、技術や社会、法律などあらゆる仕組みを連動させて管理・制御すべきだと主張する。監査や企業、政府、社会運動など、封じ込めのための10ステップを挙げる。

インターネット文明

村井純
岩波書店 1,056円(税込)

インターネットの黎明期から興隆、現在にいたるまで最前線に立ち続けている著者らしいエピソードや技術観、社会観、哲学が随所に出た書。

例えばインターネットの起源では、ARPANETよりも、同じ年に登場し「標準化に対する哲学の原点となったUNIXの方が重要」という見方は興味深い。さらに、パケット通信とOSが一体化した4.2BSDこそがインターネットの本当の起源だとする。

「周回遅れの先頭ランナーが日本の持ち味」と繰り返す。具体例を挙げ、世界に先駆けて何かをやることは苦手だが、気づいたらポリウムブーンの先頭を切っているのが日本のやり方だと断言する。

インターネット文明の政策課題や国際政治における問題に発言しているのも興味深い。「インターネット文明で果たすべき日本の役割」の章では、視野の狭い日本の行政に対して辛辣な批判を浴びせる。

ヒューマンエラーは裁けるか 新装版 ～安全で公正な文化を築くには～

シドニー・デッカー、芳賀繁ほか・訳
東京大学出版会 3,300円(税込)

人間が引き起こすヒューマンエラーを裁判や人道的な懲罰などで対処することの問題点を論ずるとともに、どうすればヒューマンエラーから学べる組織を構築できるかを考察した書。医療・航空などの事故当事者から得た具体的な事例を詳細に分析しており役立ち感がある。

著者が必要性を訴えるのは「Just Culture」。2つのポイントがある。起きた事故から最大限の学習をし、それを基に安全性を高める対策を講じること。もう一つは事故の被害者や社会に対して最大限の説明責任を果たすことである。この目

的を達成するための挑戦を続ける組織文化を「Just Culture」と呼び、後知恵による失敗追求を厳に戒める。

筆者は、ヒューマンエラーは原因ではなく組織の症状だと訴える。システム内部の深いところにある問題の発露だとする。裁判は民事であつても刑事であつてもヒューマンエラーの抑止力として機能しない。

エビデンスを嫌う人たち

～科学否定論者は何を考え、
どう説得できるのか?～

リー・マッキンタイア、西尾義人・訳
国書刊行会 2,640円(税込)

気候変動や新型コロナの否定、反ワクチン、反GMO(遺伝子組み換え作物)などの科学否定論者とはどういう人たちか、何を考えていて、どう付き合うべきか、説得可能かなどを哲学者が考察した書。トランプが米国大統領に復帰するいま、科学否定論者の実態を知ることは悪くない。説得が一筋縄ではいかないことも、よく分かる。

筆者は、科学否定論者との対話の仕方を学び、彼ら・彼女らの考え方を考えられたいかを検討することが本書の目的だと語る。説得するには、信頼を築き、敬意を示し、冷静であることが肝要だと説く。科学否定論者に反論しないことが最悪の選択肢だという。

科学否定論者に共通する特徴は5つ。

①証拠のチェリーピッキング(都合よく解釈)、②陰謀論への傾倒、③偽物の専門家への依存、④非論理的な推論、⑤科学への現実離れた期待である。

横田 英史 (yokota@et-lab.biz)

1956年大阪生まれ。1980年京都大学工学部電気工学科卒。1982年京都大学工学研究科修了。
川崎重工業技術開発本部でのエンジニア経験を経て、1986年日経マグロウヒル(現日経BP社)に入社。日経エレクトロニクス記者、同副編集長、BizIT(現日経クロステック)編集長を経て、2001年11月日経コンピュータ編集長に就任。2003年3月発行人を兼務。2004年11月、日経バイト発行人兼編集長。その後、日経BP社執行役員を経て、2013年1月、日経BPコンサルティング取締役、2016年日経BPソリューションズ代表取締役役に就任。2018年3月退任。
2018年4月から日経BP社に戻り、日経BP総合研究所 グリーンテックラボ 主席研究員、2018年10月退社。2018年11月ETラボ代表、2019年6月当協会理事、2020年4月(株)DX/パートナーズ アドバイザリーパートナー、2024年3月(株)観瀾舎を設立 代表取締役社長、現在に至る。

記者時代の専門分野は、コンピュータ・アーキテクチャ、コンピュータ・ハードウェア、OS、ハードディスク装置、組込み制御、知的財産権、環境問題など。

*本書評の内容は横田個人の意見であり、所属する団体の見解とは関係がありません。

